

原始的内観とその環境資源としての芸術

村山 正碩 (Masahiro Murayama)

一橋大学

本発表では、R. G. Collingwood の美学的名著『芸術の原理』(1938) が認識論と心の哲学に与えるインパクトを明らかにする。本書は芸術哲学の研究として、とりわけ芸術作品の定義と存在論を論じたものとして捉えられ、また、その議論には多くの問題点があると評価されることが多い。多くの Collingwood 研究者は、そのような評価が誤った解釈に基づいたものであり、適切に解釈すれば、その芸術哲学は有望であると主張している。私はその種の主張に共感しつつ、Collingwood 美学を生産的に読むための異なるアプローチがあると主張したい。つまり、それを環境資源に支えられた自己理解の研究として読むことである。

Collingwood が関心をもっている現象とは、自己理解としての自己表現と呼ぶことのできるもので、これは、自分の思考や感情、経験を言葉や絵具、音などの媒体を用いて表現することが、同時に自己理解に貢献する現象として記述できる。たとえば、自分の考えを表現するための言葉を探す試みに成功してはじめて、自分が何を考えていたかが明らかになるような現象のことである。Collingwood は主に芸術制作による感情表現を論じているが、その議論は、自己知や、心的プロセスと環境資源の関係をめぐる現代の分析哲学の枠組みで再構成できるのみならず、それらの分野に大きく貢献できるものとなっている。

Collingwood の考えでは、芸術家は自分の感情をよりよく理解するために芸術制作に取りかかる。ただし、その理解は、自分の感情を「喜び」や「悲しみ」といった概念によって分類することではなく、むしろ、それが自分にとってどのように感じられるかをよりよく意識することに存している。私の考えでは、ここで扱われている種の自己理解とは、De Vlieger & Giustina (2022) が「原始的内観 (primitive introspection)」と呼ぶ一種の内観である。簡単に言えば、原始的な内観とは、自分の経験に注意を向け、非分類的に情報を獲得する活動のことである。De Vlieger & Giustina の議論には、自己理解としての自己表現のプロセスを明らかにするための有益な道具立てや洞察が多く含まれており、Collingwood の議論に残る曖昧さを除去し、その精緻化を試みるうえで非常に有益である。

他方で、Collingwood の議論は、原始的な内観をめぐる議論を発展させるための資源を豊富に含んでいる。ここで重要なのは、自分の感情をよりよく意識するためになぜ芸術制作を行う必要があるかという点である。Collingwood の考えでは、自分の経験をよりよく意識することは想像力の仕事だが、想像力はそれ自体としては非力であり、仕事を適切に行うには、媒体(言葉、絵具、音など)の力を借りる必要がある。自分の感情を絵画において表現する場合、画家は個々の筆致、事物の描き方について、それが自分の感情に見合うかを慎重に検討し、よりふさわしい方向へと作品のあり方を調整していく

ことで、きめ細かな仕方で自分の感情を意識することができるようになる。この議論のポイントは、心的プロセスと環境資源の密接な関係を強調していることであり、これは近年の心の哲学で広く指摘されている事柄である。原始的内観をめぐる議論では、環境資源の役割はほとんど指摘されていないが、実際のところ、私たちは原始的内観に力を入れるとき、環境資源を利用することが少なくない（日記を書いたり、美術館で作品をスケッチしたり、もしかすると、ハミングしたりするかもしれない）。このことに目を向けさせる点で、また、環境資源を利用した場合の原始的内観のあり方を詳述している点で、Collingwood の議論は非常に有益なのである。また、心的プロセスと環境資源の関係をめぐる心の哲学の議論では、よく似た現象として、自分の思考を理解するために言語を利用するケースが扱われることがあるが、非言語的な媒体が自己理解にもたらす貢献に注目が集まることはほとんどない。そして、表現媒体を言語に限定しない議論を行っている点でも、Collingwood の議論は有意義なものである。

参考文献

- Alshanetsky, E. 2019. *Articulating a Thought*. Oxford University Press.
- Collingwood, R. G. 1938. *The Principles of Art*. Oxford University Press. (『芸術の原理』近藤重明訳. 勁草書房. 1973.)
- De Vlieger, B. and A. Giustina. 2022. Introspection of Emotions. *Pacific Philosophical Quarterly*, 103: 551–580.